
ポンポン

両角忘夜

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ポンポン

【Nコード】

N1848A

【作者名】

両角忘夜

【あらすじ】

ぼくの商品名は「ポンポン」。どんな勝手な愛され方をされても、残酷に捨てられても、悲しくなんかない。

1

ぼくは丸い。ふわふわとして、空間を漂っていた。その空間は風もなく重力もない。寒くも温かくもなく、そんな何処かを、ぼくは目的もなく、ただ浮かんだり流されたりしていた。

ぼくには自身の軽さや丸さがすべてで、世界というものがわからないし、興味もない。

苦しみも悲しみもない。ただ、ぼくの中心の奥深いところに、静かな気持ちだけがあるだけだ。

2

そんな丸いだけのぼくだったが、いったいどういう経緯か、気がつくと捕獲され、渋谷のショップで売られていた。

でもそれが悲しいのではない。ああそうか、と気づくまで、時間がかかったということだ。

それまで、ぼくには名前がなかった。しかし店頭に並べられたぼくたちには、「ポンポン」という商品名がつけられていた。丸くて軽いからポンポン。つまり、そういうことらしい。

3

ぼくたちはそれまで、お互いのことをまるで知らなかった。ただ丸く、漂う状態に充足して、他者には興味がなかったのである。

まあしかし、興味は今も大してない。ぼくは、複数になるとぼくたちでもあるという事実を知ったに過ぎない。そして、商品名「ポンポン」でもあるという事実を。

けどそれが、何だというのか。ぼくはけっきょく、丸いだけのぼ

くである。

4

そのショップには、お洒落な少女たちが通う。ぼくたちポンポンを見て、指でいじくり、「やわらかあい」などと嬌声をあげる。なかには「かわいい」と言ったり、「癒される」なんて言う者までいる。イヤサレルって何だろう。

少女たちはひとしきりぼくらを触って、もっとも指にフィットしたものを買っていく。

ちなみに、ぼくたちの値段は五百円だった。高いのか安いのか。そんな評価が何になるのか、ぼくにはさっぱりわからない。

5

ある日、ぼくは一人の少女に気に入られ、買い取られて行った。それから少女はいつもぼくをそばに置き、時間があると触るのだった。

朝起きて撫で、登校前に頬ずりする。帰宅して宿題するときも、テレビを見る時間も、眠る前も、思い出すとぼくを触った。そしてうっとりした表情で「気持ちいい」なんて言う。

ぼくにはどうでもよかった。少女に買われ、愛玩されるようになったからって、ぼくは変わらない。ぼくなのだ。

6

いつからか、少女はぼくに向かって独り言を呟くようになった。親のこと、学校のこと、友達や彼氏のことなど。

話してから、「馬鹿だなア、あたし。こんなボールに愚痴言っても仕方ないのに」と反省する。それから溜息をついたり、涙を流す

ことさえあった。

けれど、ぼくには関心がない。突然激高した彼女が、ぼくを壁に叩きつけたときも、ただバウンドして転がっただけだ。

しばらくすると、「ごめんね。ごめんなさい」と泣きじゃくり、ぼくを拾い、抱きしめたりする。

少女なんて、つくづく多感な生物である。

7

親は無理解、学校はイヤ、友達は意地悪で、彼氏は冷たい、というのが彼女の言い分だった。

しかしまあ、どうしてこんなに他人のことが気になるのか。

誰かの感情でいちいち揺らいでたら、愛玩されたり投げ捨てられたりするぼくはどうすればいいのか。くたびれちゃうよ。

8

けつきよく冷たい男とは別れ、新しい彼氏ができると、少女はぼくのことなど、どうでもよくなったみたいだ。

捨てられたぼくは、近所の子供たちにもらわれ、野球ボールとして再利用された。

泥がついてガサガサになり、頬ずりされることももはやない。

ある日、ホームランを打たれたぼくは遠くに飛ばされ、マンションの外壁にバウンドして、深い溝にポチャンと落ちた。そのままどんぶらこ、どんぶらここと流され、暗渠に吸い込まれていった。

90

下水道のねばついた壁には、鼠やゴキブリ、カマドウマやウジムシなどが、それぞれ活動していた。

ぼくの隣を腐った林檎が流れている。彼らは林檎に群がったが、ぼくには関心ないみたいだ。

いったいどれほど時間が経ったのか。ずいぶん流された気がする。幾つかの流れが合流する地点で、懐かしい奴と再会した。昔、渋谷のシヨップと一緒に並べられていた仲間のポンポンだ。ぼく以上に汚れ、ナイフで切られたような傷まである。

腐った林檎、それに二つのポンポンが並んで流れていく。

10

ゴキブリたちはやがて交尾し、子孫を残す。林檎も実のなかに種を宿し、地面に植われれば木となれたはずだ。しかし彼は、もはや林檎としての目的を失っている。

ぼくはどうか。

少女の手から離れ、野球のボールでさえなくなったぼくは、腐った林檎と同じなのか。

答えはNOだ。

「ポンポン」という商品だとか、そんなのは人が勝手に決めた役割だ。元々ぼくには目的もなく、何かに依存したこともない。

ポンポン

11

死とは何だろう。いなくなることだ。
生とは何だろう。いるだけのことだ。

愛や憎しみって何。周りへの期待や執着なら、ぼくには関係ない感情だ。

抱きしめられれば温かいし、投げつけられたらホントは痛い。でも、そんなことで気持ちは揺れない。この先何があっても、ぼくは平気だ。

悲しくなんかない。

12

けれど、この先なんてなかった。

流れの途中で柵があり、たくさん浮遊物がせき止められ、かつたるそうに溜まっていた。いつか清掃員に回収されるまで、浮かんでいるんだろう。

空き缶やペットボトル、木の枝や魚の死骸、その腐乱した姿には未練があり、水が揺れるたび、ざわざわと騒ぎ立つ。

○13○

あるとき一枚のゴム手袋が流れてきた。彼は言った。

「なんて惨めだ。なんて悔しい存在なんだ。捨てられた俺たち。この地獄を、この怨みを、清潔無害な消費文化に耽る奴らに見せてやりたい」

手袋の言葉はゴミたちを揺るがした。ざわめきが広がる。

「俺は約束しよう。君たちを必ず救済してみせる！」。手袋は力強く宣言した。

気がつくともう一個のポンポンがない。ナイフの傷から水を吸い、重たくなって沈んだのだろうか。

腐った林檎は周りに同調して揺らぎ、こすれあいながら、ときどきキュリ、キュリ音を出す。

ぼくは静かに浮かんでいるだけだ。

それから日が経ったが、手袋は何もできなかった。ゴミたちはふやけ、明らかに不満そうだ。

あるとき手袋はこう言った。「これより濁流を遡り、マンホールから噴出して、人間どもを急襲する。目にも見せてやろうじゃないか」

だけど、誰もそんなことはできなかった。

別の日に、手袋は言った。「神様がいるなら、こんな我らを見捨てるはずない。みんなで祈れば、奇跡が起こり、大願成就となるであらう」

だけど誰も祈らないし、何も起こらなかった。

それから手袋は沈黙し、ゴミたちは虚脱した。

○150

ある日気がつくくと、ぼくは水面から三十センチくらいのところを浮かび、醜くひしめくゴミたちの群れを見下ろしていた。

そのなかには、すっかり腐って水膨れしたぼくの死体もあった。

もはや丸くもなく、軽さもない溺死体である。

ぼくは飛んだ。地面をすり抜け、空に飛び出す。

天国つてあるのかな。それとも、やがて消えてしまうのか。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1848a/>

ポンポン

2008年11月7日07時08分発行